10 月第 3 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 10 月 15 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 21 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 神が証しして 」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 1 章 8～15 節（新約 p273）
■讃美歌：20「 主に向かってよろこび歌おう、 」
　　149「 わがたまたたえよ、主なる神を。」

今月 10 月は、「ローマの信徒への手紙」を読んでいます。1 日と先週の 8 日は、2 回にわたって「ローマの信徒への手紙」の冒頭の書き出し部分である 1 章 1 節から 7 節を取り上げました。そして、本日は 8～15 節をご一緒に読みたいと思います。「ローマの信徒への手紙」の著者である使徒パウロは、8 節で「**まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。**」と感謝の言葉を述べています。そのように、宛先の人々への挨拶に続いて神様への感謝を表すのが、パウロの手紙の特徴と言えるかもしれません。例えば、使徒パウロの書いた最初の手紙と言われ、新約聖書の中でも最も早い時期に書かれたと言われている「テサロニケの信徒への手紙一」、そして「コリントの信徒への手紙一」、さらには「フィリピの信徒への手紙」などが同じ構成になっています。そしてその内容は、宛先の教会に集っている人々を祈りに覚える時、神様に感謝をささげているというものです。いわば、祈りと感謝とはいつも切り離せないこととして、使徒パウロの中に位置づけられていたのだと思います。そのような習慣が、パウロの祈りに力を与え、祈られている対象である教会やそこに集う一人一人にも力を与えたのでしょう。私自身も、そのようにありたいと思わせられるところです。

ところで、本日の箇所の内容を一言でいうならば、パウロはなぜこの手紙を書いたのか、ということになるでしょう。すべての人に救いをもたらす福音を語りたい、というのがその動機と言えるでしょう。そして、とりわけ宛先であるローマの教会の人々に対しては、これからあなたがたのところを訪ねたい、という強い願いが語られています。10 節にこう語られています。「**何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。**」また 13 節にもこうあります。「**兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。**」。これらから分かることは、パウロはまだローマに行ったことがない、ということです。彼は、まだ行ったことのないところだけれども、手紙の名前

に「ローマの信徒への手紙」と記したように、イエス・キリストを信じて集っている、まだ会ったことのない人々との新たな出会いを求めて手紙を記しているのです。

「ローマの信徒への手紙」を取り上げた最初にも言いましたが、この手紙の著者・使徒パウロは、地中海沿岸の地域を旅して回りつつ、イエス・キリストによる救いの知らせを宣べ伝えていました。時は紀元50年代の半ばごろのことです。それ以前の紀元30年ごろ、イエス・キリストが十字架につけられて死にその死からよみがえられて天に昇られた後に、約束の聖霊が降って最初の教会がエルサレムにできました。その後で33年ごろに、熱心なユダヤ教徒であったパウロはダマスコ付近で復活の主イエス・キリストに出会い、ユダヤ教からキリスト教に回心します。周辺の地中海世界にも少しづつキリスト教が広がり始めたころのことです。当時、キリスト教会ができ始め新約聖書が書かれた舞台となっていたのは、今の中東から地中海周辺でした。そこではローマが世界の中心の都市と考えられていましたので、パウロもそこにいるイエス・キリストを信じる人々を訪ねて、キリストのことを宣べ伝えたいと考えていたのです。すでに何度もお話したことですが、そのころはまだ、イエス・キリストの生前にお語りになった言葉やなさった行いや奇跡などは、口移しの伝承がいくつかのグループによって担われていたという段階で、福音書という形で文章にまとめて書き記すということが行われていませんでした。そういう状況で、パウロはイエス・キリストを指し示すのに、自分自身が体験したことや彼自身が聞いたことなどを、手紙という形で最初に文章として書き表したのです。ですから、その内容は、パウロ自身の体験に基づきながらも、彼自身がよく知っている当時の聖書（今の私たちが読んでいる旧約聖書の部分になります）に書かれていることがイエス・キリストを指し示すものであり、イエス・キリストこそが私たちの本当の救い主である、と書き記したのです。そして、そのことを多くの人たちに知ってほしいと望んでいたのです。そのために、 ローマにいる信徒たちにはあらかじめ手紙を出して、その内容を知らせておきたいと思ったのです。 それがローマの信徒への手紙です。

本日の箇所1章8節から、いよいよローマの信徒への手紙の具体的な内容に入ります。パウロは８節で、既にローマの人々にキリスト教の信仰が宣べ伝えられて、ローマという町に教会が存在することを神に感謝することから書き始めています。それに続いて9、10節でこう言っています。「9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10 何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。」パウロがここで言いたいことの中心は、「私は、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こしている」ということです。そして、その祈りにおいて具体的に願っているのは「何とかしていつかはあなたがたのところへ行ける機会があるように」ということであり、私が仕えている神がそのことの

証人となって下さる、と言っているのです。つまりパウロはここで、自分がローマの教会の人々のことを覚えて祈っている内容とはこのようなものだ、と語っているのです。このように、相手のことを覚え相手のために祈る祈りを「とりなしの祈り」と言います。それは祈りの大切な要素の一つです。私たちの祈りは、ともすれば、自分のことやせいぜい家族のことを祈るというように、自分のための願いごとに終始してしまうことがあります。しかし聖書は、それだけではなくむしろそれ以上に、他の人のための「とりなしの祈り」が大切だということを教えているのです。ですからパウロも、ローマの教会の人々のためのとりなしの祈りをしているのです。そしてここで注目すべきことは、パウロがこのとりなしの祈りの内容を「祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし」と言って、その姿勢について語っていることです。祈りにおいて相手のことを思い起こすこと、それがとりなしの祈りの基本です。そして、そのとりなしの祈りを自分（パウロ）がしていることは、誰よりも神が証ししてくださることだと言っているのです。

　では、私たちにとってとりなしの祈りとはどのようなものでしょうか。ある方は、とりなしの祈りの具体的な方法について、次のように勧めています。「何かを祈る前に、先ずその人のことを思い起こすのです。具体的には、その人の顔を思い浮かべるのです。それを祈りの中でするのです。つまり、神に顔を向け、神を見つめつつ、その人のことを思い起こし、見つめるのです。その時、そこには自然に、その人のためのとりなしの祈りの言葉が与えられていくでしょう。つまりとりなしの祈りの秘訣は、祈りにおいてその人のことを思い起こすことです。私たちが、とりなしの祈りがなかなかできないと感じたり、あるいはそれがおざなりな、心のこもらない紋切り型の祈りになってしまうことが多いとしたら、それは、祈りの中で他の人のことをしっかり思い起こしていないからなのではないでしょうか。」　つまり、とりなしの祈りの言葉そのものが、私たちが相手のことを思い起こしながら真剣に祈るときに、神様から与えられるものであるということになるのでしょう。現代においても、私たちの知らないところで多くのとりなしの祈りがささげられ、その祈りに生かされて今の私たちがあります。そのことを本当に知ることができたなら、今度は私たち自身がとりなしの祈りをささげる者へと必ず変えられていくのではないでしょうか。そして、そこに私たちが本当に信頼を置くならば、この私の言葉足らずの小さな祈りであっても、主なる神様はその祈りを聴き必ずみ旨を行ってくださる、それが主なる神様の証であると信じることができるはずです。